

要約

明治以降日本における海外移民の通史的記述を行うことを目的に執筆した。

まず総論で、移民を植民地・勢力圏を含めて総合的に扱うべきこと、移民の起動要因としてプッシュ・ファクターとプル・ファクターのほかに、斡旋機関や情報の伝播、そしてそのときどきの国際関係があることを述べ、またその形態は労働出稼ぎに限定するものではなく、中小商工業者や農漁民も含めてとらえるべきことを主張した。

そのうえで、戦前編と戦後編に区分し、前者では明治期にはハワイ・アメリカ本土への出稼ぎ労働移民、朝鮮居留地への商業移民がきわだっており、大正期以降になるとフィリピン・南洋群島・満洲への農業移民が増加していくとする。後者では大正期以降と同様に主として南米への農業移民を中心としつつ、アメリカ合衆国への農業研修や西ドイツへの炭坑出稼ぎもみられたが、高度経済成長が進行する1960年代後半以降は見られなくなるとした。

なお、附論において、著名作家の紀行文等における日本人移民に対する位置づけについて紹介し、戦前から戦後初期にかけての日本人移民がどのようにみられていたのかに関する手がかりを得ようとした。